
リトル・ガール・ブルー

Chechilia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトル・ガール・ブルー

【NZコード】

N1958U

【作者名】

Chuchillia

【あらすじ】

ラジカセがもう一度息継ぎをした。また新しい歌を歌い始めるのだ。太陽の光が背中から私を包む。爽やかな炭酸が喉の奥で弾ける。私はまだパジャマで、髪の毛もセットしていない、それはあまりにも眠りから覚めたに相応しい格好だった。あとは熱いシャワーを浴びれば私は生まれ変わるので。ついさっき生まれたように、また1日をはじめるのだ。

ベンチに腰掛けて、蝉たちの声を聞いていた。この公園の木々にいつたいどれくらいの数の蝉がいるのだろうと僕は想像してみた。だけど具体的な数を思い浮かべるのにはいささか暑すぎて、結局僕はその結論に達することができなかつた。

暑い夏だ。それは僕にじつとりとした汗をかかせた。だけど、その汗は僕の体にべつとりと纏わり付くだけで、決して流れ落ちることはなかつた。体の内部の温度をじりじりと上げる熱とは別に、僕の体の表面を照らす日光は攻め立てるように僕の肌を焼いた。そこには熱さとは別の種類の小さな痛みのようなものがあつた。

僕にはその体の火照りや痛みを、何となく現実の肉体ではない、他の世界の僕の肉体に与えられているようなものに感じられた。それは季節の変わり目に訪れる懐かしい思い出のようなものだ。僕はいつかの、暑すぎる夏の中にいる僕にその火照りや痛みを移したのだ。

蝉たちが鳴く止む気配は全くなかった。蝉はこのまま永遠に鳴き続ける。その永遠の中に僕は取り込まれ、同化させられてしまう。そんな気がしたが、その想像も、搖らぎのない煙のようなもので、公園の掲示板の脚にくくり付けられた犬のあぐびによつてかき消された。そんな些細なことですら、僕の思考を一瞬にしてかき消してしまう。何かを考えるのには暑すぎるし、蝉の鳴き声はうるさすぎるのである。

犬はひどく退屈そうにしていた。掲示板が作つた極僅かな影の中に横たわり、舌を出して、さも暑そうにしていた。短いものとはいえ、あれだけの体毛に包まれていては、彼が感じる暑さは僕よりもかにひどいものだろう。

白い帽子に薄いブルーのワンピースを着た女の子がその犬の前に腰をおろし、犬の頭を撫でていた。だけど犬は何の興味も無さそう

に虚空を眺めていた。彼女に撫でられるのを喜んでも嫌がつてもいよいようだった。あるいは犬がそういう反応をするには、暑すぎるのかもしない。蝉はやはり際限なくまだその合唱を続いている。

やがて女の子は虚空を見つめ続ける犬に飽きたのか、あるいは何かしらの反応をしてくれることを諦めたのか、僕の方を向いてニッコリと微笑んだ。実際にはそれはただ太陽が眩しかつただけなのかもしれない。だけど僕にはその表情が笑顔に見えた。とても綺麗な、まるで暑さを感じさせないような笑顔だった。

彼女は右手で帽子を抑えながら小走りで僕の方に向かつてきたり、この暑すぎる夏の気温よりは遙かに快適な風が吹いた。だがそれは決して涼しいと言えるものではなかつた。この風がもじ大して熱くない日に吹いたなら、それは温風か、悪くて熱風と呼ばれることは間違いかつた。夏の太陽は本当に、何もかもの熱を増幅させているのだ。

女の子は僕の隣に座つて僕の顔を覗き込んだ。彼女の肌は全く日焼けしていなかつた。透き通るような白い肌は、彼女の肉体が、どこか別の世界の彼女の肉体と取り替えたようなものに見えた。別の世界からとつてきた彼女の肉体に、彼女の精神やら思考やらが詰め込まれているのだ。それぐらいに彼女の肌の白は綺麗で、同時に暑い夏には場違ひな気がした。

彼女は僕の左隣から、僕の目を覗き込んだ。だが僕は彼女と目を合わせなかつた。僕は右手を前に出し、じつと手のひらを見つめてみた。美しくも醜くもなかつた。手のひらにはきつちりと太陽の熱が感じられた。僕には想像もできないほど遠い場所からこの熱は運ばれてきたのだと僕は思つた。僕の右手はちゃんとそれを確認できるし、受け止めている。

僕はどうなのだろう。僕の精神はきちんと僕の中にあるのだろうか。思い、考える自分がどこか遠くの別の場所にあって、この手のひらのように、肉体がそれを確認し、受け止めているのではないかと思つた。

だけど、そんなことはありえない。僕はここにいるし、僕の肉体の中には僕自身が考え、思っているのだ。

「ねえ、何をしてるの？そんな所に居たら日射病か熱中症にかかっちゃうわよ？どこか影に入りましょうよ」

僕は彼女の声には答えず。何か他のことを考えていた。何について考えていたのかよくわからない。あるいはそれはただの漠然とした、考える、という行為なのかもしない。

僕は彼女を無視したわけではなかつた。（ねえ、何をしてるの？そんな所に居たら日射病か熱中症にかかっちゃうわよ？どこか影に入りましょうよ）彼女は僕を急かしているわけではない。彼女が影に入りたいのなら、勝手に影に入りに行けばいい、影はそこら中にある。そして僕はそれでも敢えてここに座つたのだ。おそらく彼女も僕のそういう行動を理解している。要するに彼女は優しいのだ。（どこか影に入りましょうよ）僕のことを心配し、誘つてくれた。僕にはその言葉の中にある彼女の意思がわかっている。

僕にはわかっている。彼女は優しく、清々しく、朗らかだつた。時には怒つたり泣いたりすることもあった。だけど彼女は賢かつたから、僕には彼女が何故怒り、泣いているのかということがわかつた。それほどひどい喧嘩をしたことはなかつた。お互いがお互いを傷付けたくなかったのだ。だから僕らは、どんな時でも歩み寄ろうとした。お互いを理解しようとした。理解すればまた知らない部分が顔を見せた。だけど僕らはそういうものをうまく処理し、同じ時間を過ごし、あるいは楽しんでいたのかもしない。それは困難を乗り越えるというような挑戦的な満足ではなかつた。いつの間にかそこにある幸せを感じ取ることが僕達には出来ていたのだ。僕達は互いに同じ方向を見つめ合つていた。

だから僕には分かつて、彼女は僕を愛していた。僕も彼女を愛していた。愛している。

（ねえ、何をしてるの？そんな所に居たら日射病か熱中症にかか

つちやうわよ？どこか影に入りましょうよ）

わかつてゐる。僕は彼女の言葉を無視したわけではない。だけど僕には言わなければ、訊かなければいけないことがあるのだ。だからその言葉に耳を傾けることはできないのだ。

僕の目からこぼれ落ちた液体は、夏の太陽に晒されて乾ききつた地面に潤いを与えた。砂の上には小さなシミがぽつぽつと増えていった。

僕は膝の上で左手の手首を握った。かなり力強く握っていたが、その行為にどんな意味があるのか、僕にはわからなかつた。

蝉は相変わらずやかましい合唱を続けていた。だがやがてその合唱は完全な背景のように空気に同化し、調和のない静寂を創りだした。耳の奥に数多の蝉の鳴き声が反響する。だがそれは同時に絶対の静寂だった。そして僕の言葉はその静寂に溶けこんでしまいそうなほど弱々しかつた。あるいは蝉の合唱が僕の声を鈍く形のはつきりしないものにしてしまつてゐるのだ。

「ねえ」

僕はやつと薄いブルーのワンピースに目を向けることができた。白い帽子はやや斜めを向いている。彼女は空を見上げてゐるのだ。

「ねえ、君はもう、死んでるんだろ？」

窓から光が差し込んで、瞼の向こう側から私の眼球を照らしている。眼を閉じて眠っていても、太陽の光がはっきりと感じられる。そのうちに。どこからともなく黄色い大きなくちばしをもつた真っ黒な大きな鳥がやってきて、やはり黒い羽に覆われた翼の間から金色に光る懐中時計を取り出した。鳥はチラリと時計を見ると、まるで国歌斎唱を始めるサッカー選手みたいにきちんと立ち直した。器用に懐中時計を持つた翼は後ろで組まれている。

黒い鳥が僅かに踵を上げて息を整えたかと思うと、突然、ギイギイギイーーーーと、とてつもない騒音をたてて鳴きだした。それは鳴き声といつよりは叫び声に近くで、私にはとても不快な音に感じられた。

私はそつやつて目を覚ました。不快な、鼓膜にねじ込むような鳴き声でわめきたてられたのだから、それはもちろん不快な目覚めだつたし。同時に不快な朝だつた。

どれくらいの時間眠つていたのか私は全然覚えていなかつた。私はいつもどれくらいの時間を眠つて過ごしていったかわからない。眠つている間に時間ネズミがやってきて、私がいつ眠りについたのかという記憶を持つててしまうのだ。時間ネズミはそうやって、どんな痕跡も残さずにどこかへ行つてしまつ。黒い鳥が何も残さずに消えてしまつていてるよつに。

「ああ、良く寝たのかしら。神様、私はよく眠つていたのかしら?」
「泥のよづに眠つていたよ」

「ねえ、私思うんだけど、泥は眠つてなんかいわよ
「君が知らないところで眠つているんだよ」

「そういうものなの?」
「そういうものだよ」

「どこからか神様の声がした。それはどこか高いところから聞こえ

る、私の住んでるマンションの上の部屋の向こう側、空のずっと上方から聞こえる。だけどそれは同時に私の頭の中から聞こえてくる。

「まだまだ遅い時間じゃないけど、そろそろ起きたらどうだい？」

「起きてるじゃない」

「何か行動を起こしたほうが良いってことだよ」

「どうして？」

「わかつちゃうんだよ。もし君がずっとベッドの上だ」「じりじりしてこたら、君は後悔することになる」

「それもそうね」

「することがない田代、いろいろやってみるんだよ」

「そうかもしない。たしかに、何となくお皿なんかに田代が覚めちゃつたら嫌な気分になっちゃうし」

「朝食でも作るといこ」

「そうね、神様の言うとおりにしてみるわ」

私がベッドから降りると、パジャマの袖から小さな灰色ワードが飛び出した。ワードはラジカセの所まで行って素早く再生ボタンを押した。カチッ。小気味の良い音がなつてラジカセは歌い出した。それと同時に灰色ワードは消えてしまった。

フランク・シナトラの歌うリトル・ガール・ブルーが聞こえてくる。何となく、天気の良い朝には似合わないけれど、何となく、天気のいい朝のフランク・シナトラが私は気に入った。

座つて、指折り数えて「いらっしゃい、あなたに何が出来るかしら？」歳をとつた少女。子供の時代は過ぎ去ったの。

さあ、座つて、その小さな指で数えてみて、ツイてない、憂鬱な女の子。

座つて、指折り数えて「いらっしゃい、降りかかる雨粒を。わかつたのよ、もづ。みんなこの雨粒ぐらいのものだつて。

私は台所に行つて冷蔵庫の中を覗いてみた。その間にもラジカセは歌い続けている。冷蔵庫の中には昨日作つたらしいサラダが入つていた。だけど私にはそれを作つた記憶はなかつた。

「こんなものをいつ作つたのかしら」

きつと記憶ねずみがその記憶を奪つていつてしまつたのだ。たぶん私が寝ている間だらう。

「昨日の夕方だよ。君は昨日の夕方、本屋に行く前にサラダを作つていたんだよ。帰つたらすぐに食べられるようにね。ワインも冷やしたままだし、戸棚にはフランスパンだつて残つているよ」

「どうして結局食べなかつたのかしら？」

「君は帰りにマクドナルドでフィレオ・フィッシュを買つてきたんだ。だから食べる必要がなくなつたんだよ」

「ああ、思い出したわ」

「君はMサイズのコカ・コーラを飲みながら帰つてきた」

「ククリ、と私は大きく頷いた。神様の言葉と自分の記憶の一致に納得したのだ。

「そうそ、でもね、仕方なかつたのよ。ああいうものつて、突然食べたくなつちゃうのよ。あれつてね、神様、どう食べたつて不味くはないの、そういうものなのよ。それでね、そういうファスト・フードとかインスタント食品つて突然食べたくなつちゃうの」

「そういうものなのかい？」

「そういうもののなの。誰が食べたつてそれなりに満足出来ちゃうの。じびきり美味しつてわけじゃないの。そりやあたまにキライな人つているだろうけど、そういうものなのよ」

「大衆的味つけ」

神様は妙な文学的表現を使つた。何となくこの神様は可愛げで、ずいぶん茶目つ氣があるなと思つた。神様は本当の、あるいは本当

に神様なのだろうか、神様は本当に存在するのだろうか？

「そうよ、カツブヌードル的味付け、マクドナルド的味付け

「ボンカレー的味付け、ポテトチップス的味付け」

どれもジャンク・フードみたいなものだ。私はクスクスと笑った。何となく神様は可愛かった。神様もクスクスと笑った。

ラジカセは歌うのを止め、すぐに別の曲を歌い出した。その空白の時間はまるでラジカセの息継ぎだった。

今度はラジカセの中でビーチ・ボーイズがコンサート始めた。ラジカセの中にあるどこかのスタジアムで、ビーチ・ボーイズが歌っている、興奮の絶頂にあるファンが観客席から溢れんばかりに跳ね、あるいは揺れている。

よし踊れるぞ。ダンスだ、踊れ、踊れ。さあホントにホットなビートだぜ。

これがピッタリだ。ダンス。ダンス。ダンス。この周波数でピッタリだ。

ホントにホットなビートだぜ。ダンス。ダンス。ダンス。ホントにホットなビートだぜ。

冴えない気分のときなんかは彼女を傍らにし、さつさとそんなものは振り払うんだ

ラジオがうまいことやってくれるのさ

私は朝食を作るのをやめて、冷蔵庫からサラダを取り出した。冷蔵庫にはイエロー・テイルのシラーズがよく冷えていたが、さすがに朝からアルコールを飲む気分にはなれなかつた。

サラダの入つたボウルをテーブルに持つて行くと、赤い蝶ネクタイをした2匹の手乗りザルが簡素なテーブル・クロスを敷いていた。机の上に乗り、小さな体を器用に使うその姿は、ベッド・マイクに手慣れたホテルの従業員みたいだ。私はサル達の用意してくれたテーブル・クロスの上にサラダ置いて、戸棚にあるフランスパンに手を伸ばした。フランスパンは既に食べやすい大きさに切られていた。これも私が昨日のうちに済ませたものだろう。横目でサルの方に目をやると、1匹のサルが見事なジャンプで食器棚に飛びつき、引き出しを開き、自分の背丈ぐらいはあるフォークを抱えてもう一度テーブルに飛びついた。さすがにフォークを抱えていては少し私もドキドキしたが、サルは私が思つた以上にうまくやつてのけた。そこには不安というものが感じられなかつた。「いつもやつていることだぜ」という感じでサルはやつてのけたのだ。「でも気をつけたほうがいいよ、慣れてきたこととか、慣れ親しんでいることこそ本当は危険なのよ」私は心のなかでそう囁いた。

「ありがとう」

私がサル達にそう言つと、彼らは満足したように、心なしかニッカリとした表情を作つて消えていった。

バターと真っ白なお皿を持つてきたところで、冷蔵庫にあつたオリーヴのことを思い出した。テーブルに戻る前にオリーヴを1つ口にして、その味を確かめた、悪くない。オリーヴの塩辛さが私に喉の渴きを知らせ、喉の渴きがトニツク・ウォーターを思い出させた。「神様、たしかどこかにトニツク・ウォーターがあつたわよね？あれつてどこにいつちやつたのかしら？」

「玄関だよ。冷蔵庫がいつぱいだつたんで、でもるだけ暑くないと
ころに置くつて言つてたじやないか」

「やうだつたわ、ありがと」

「いいんだよ」

オリーヴの瓶を持つたままトニック・ウォーターを玄関まで取りに行くと、3匹の蝶々達が話し合ひをしていた。私が近づいて来るのを感じたのか、トニック・ウォーターに手を伸ばしたところで彼女たちはどにかへ飛び去り、消えてしまった。彼女たちはとてもシヤイなのだ。

トニック・ウォーターをコップに入れて、私はやつとサラダを食べるにした。ドレッシングを持つてくるのを忘れたと思つたが、サラダには既にシーザー・ドレッシングがかかっていた。私にはそれをかけた記憶がなかつたが、それが自分でやつたことなのか、あるいは向かい側の椅子に座つて本を読んでいる眼鏡のてんとう虫がしてくれたのか、私には判断ができなかつた。

ラジカセがもう一度息継ぎをした。また新しい歌を歌い始めるのだ。太陽の光が背中から私を包む。爽やかな炭酸が喉の奥で弾ける。私はまだパジャマで、髪の毛もセットしていない、それはあまりにも眠りから覚めたに相応しい格好だつた。あとは熱いシャワーを浴びれば私は生まれ変わるのだ。つこせつと生まれたよつて、また1日をはじめるのだ。

一呼吸を置いたラジカセがまた奏で始める。

またあとで（シーコーレイター）、アリゲイター。ああまたね（イントアホワイル）、クロコダイル。

さよなら（バイバイ）、蝶々（バタフライ）。ハグしておくれ（ギヴァハグ）、てんとう虫^{トウバグ}。

僕が彼女と初めて出会ったとき、僕は知らないうちに彼女の瞳をずっと見ていた。そこには僕を惹きつける妙な力があった。その間、僕は瞬きというものを完全に忘れていた。しばらく経つてから僕は瞬きをしていなかつたことにやつと気付いて、意識的に瞬きをしたのを覚えている。そういう些細なことまで、僕はよく覚えている。僕の記憶力が格段に優れているとか、そういう事ではなくて、彼女の瞳にはそういう力があったのだ。事象や映像というものを脳の奥に焼き付けるような力任せの記憶ではない。つまりそれは感覚的記憶というもので、例えば僕は、人生で最も間隔の長かつた瞬きという行為を、眼球に染み入った涙の感覚で覚えている。それは強引に押し込められた細胞の記憶ではなく、自然に馴染ませた、彼女の不思議な瞳の力によるものなのだ。

今日みたいな蒸暑い夏の日の夕方だった。今僕が座っているベンチに、その日も腰を下ろしていた。午前中とは違う、短い命のうちの一日が終わりを迎えることへの嘆きのような蝉の声を聞きながら、僕は夕飯の献立を考えていた。蝉の鳴き声は朝から夜にかけて、じっくりとその音色を変えていった。

（そろそろお前らに任せたぜ）蝉がそう言つて地上の虫たちに合唱団の入れ替わりを告げ始めた頃に、彼女はやつて來た。

彼女が公園の入口に足を踏み入れたとき、蝉たちの合唱は途絶え、涼しげな風が彼女を迎えるように優しく吹いた。

そこには一瞬の静寂というものがあった。コオロギや鈴虫といった地上の夏の虫たちが静寂を創りだした。そこには確かに彼らの鳴き声があつた。しかしそれらはどこか遠くの世界で鳴つている意味のない呼び声のように空氣と同化していた。

世界が変わったような気がした。風で帽子が飛ばされないように、左手で（賭けてもいい、間違ひなく左手だった）帽子を抑えながら

こちらに向かつて来る彼女を、僕はずつと見ていた。瞬きひとつせずに。

僕の世界が音を取り戻したのは、彼女が僕に声を掛けたときだ。それと同時に、何か重要な線がブツンと切れてしまったよう、虫たちの合唱が現実の世界の音となつて僕の耳に入り込んできた。「この辺りに本が置いてなかつたかしら？大切な本なんだけど、どうも忘れちゃつたみたいな」

僕には彼女が何を言つているのかわからなかつた。僕は彼女の声を確かに聞いたのだけれど、その意味が全く分かつていなかつた。つまり僕はただ漠然と彼女の声を聞いただけなのだ。

（彼女が何かを言つた）僕ははつとなつてじつくりと瞬きをしてからやつと口に出した。彼女からみるとそれは不思議な光景だつただろう。

「ごめん、なんだつて？」

彼女はおかしなものを見たようにクスリと笑つたが、それは僕に全く不快感というものを与えなかつた。世の中にはそういう事がでくる人間が存在するのだ。むしろそれは僕に好意的な何かを与えた。世の中にはそういう事ができる人間がいるのだ。

「ここで本を読んで、忘れちゃつたみたいなのよ。大切な本なの」僕がここに座つたのは、夕方になつてだいぶ気温が下がつてからだつた。だけど僕はそのベンチに置き去りにされた本を見たことがなかつた。

「見てないな。夕方からここにいたけど、最初から何もなかつたよ」

「そう、あなたは嘘をつくような人じやないものね。だけど困つたわね」

（あなたは嘘をつくような人じやないものね）彼女は昔から僕という人間を知つてゐるかのようないい方をした。実際に僕は嘘といふものがあまり好きではなかつた。そして僕も彼女は昔から僕のことを知つてゐるのだと思った。それは現実的ではなかつたが、少なくともその時の僕にはそう感じられた。

「君は昼間からこんな所に座つて本を読んでいたのかい？」

「一日で肌が黒くなつてしまいそうな日光と暑さの中で彼女は本を読んでいたのだろうか。何しろ彼女の肌は際限なく白く透き通っていた。それは水色のシャツの下で光り輝いて見えた。

「まさか、そんな事をしてたら日射病やら熱中症やらで倒れちゃうわよ。昨日の夜にここで本を読んでたのよ。月が綺麗だつたから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1958u/>

リトル・ガール・ブルー

2011年11月4日11時16分発行